

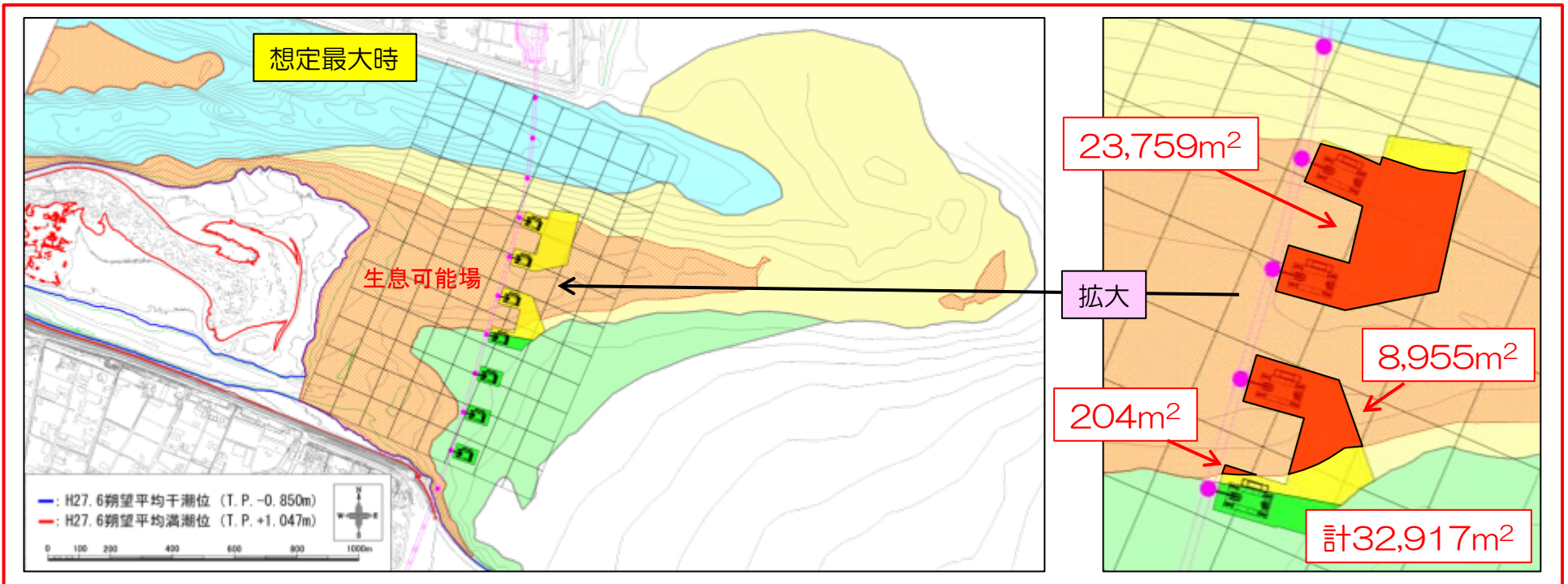
■底生動物のハビタット区分の検討⑱ ～区分1の指標種の生息範囲に対する浚渫の影響評価～



ハビタット区分1の指標種の生息可能場に対する浚渫の影響を定量化した結果を以下に示す。

- ①平成27年度濁水期は、バカガイとヒサシソコエビ科に対して0.03%、フジノハナガイに対して0.07%の影響になることが確認された。
- ②想定最大時は、バカガイとヒサシソコエビ科に対して2.67%、フジノハナガイに対して4.52%の影響になることが確認された。

例：フジノハナガイの生息範囲に対する想定最大時の浚渫範囲



項目	バカガイ		ヒサシソコエビ科		フジノハナガイ	
	(m ²)	割合	(m ²)	割合	(m ²)	割合
生息可能場面積	1,538,342	-	1,538,342	-	727,917	-
平成27年度濁水期	482	0.03%	482	0.03%	482	0.07%
想定最大時	41,056	2.67%	41,056	2.67%	32,917	4.52%

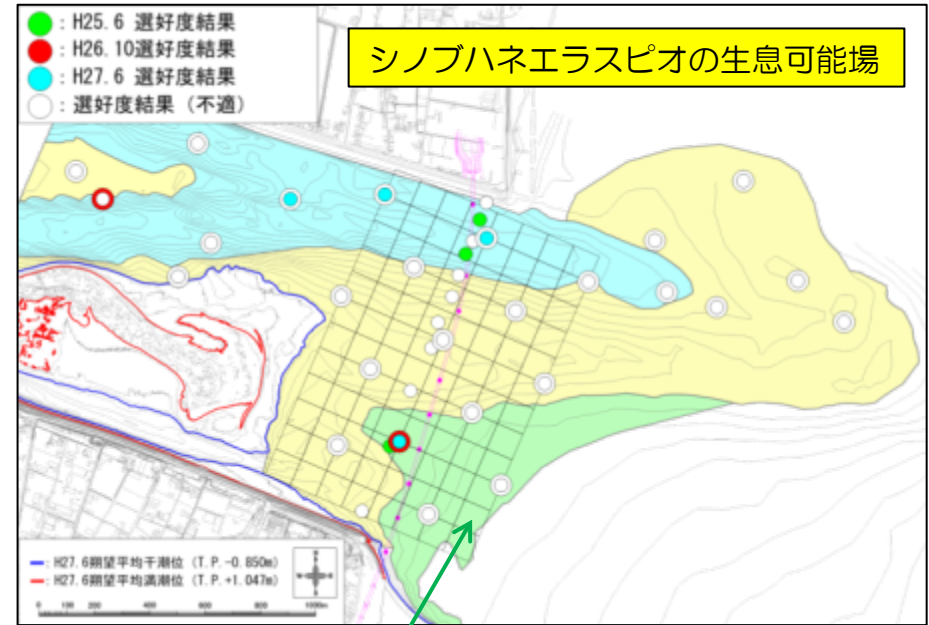
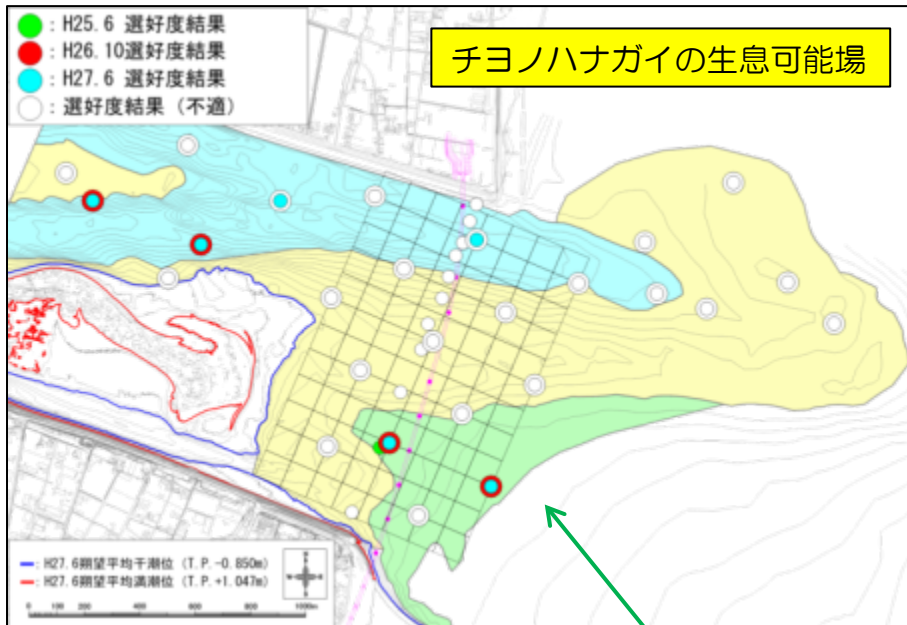


■底生動物のハビタット区分の検討②〇 ～区分2の指標種の生息範囲に対する浚渫の影響評価～



ハビタット区分2の指標種の生息可能場に対する浚渫の影響を検討した結果を以下に示す。

- ①区分2の指標種に関しては、生息可能場の評価に含泥率が必要であることから、これまでに調査した地点データの評価に制限され、面的な分布範囲を予測して浚渫範囲に対する**定量評価をするに至らなかった**。
- ②現時点で把握出来た結果として、選択した指標種は区分3にも出現し、生息評価モデルでもそれが示された。
- ③前述の通り、区分2にける浚渫は**平成27年度濁水期に0.91%、想定最大時に4.31%**であることから、少なくとも、指標種に対してその数値以上の影響になると考えられた。
- ④上記の課題に対し、面的な粒度分布を把握することができれば、正解率の高いモデルを用いることで面的な生息可能場を予測することができると思われる。

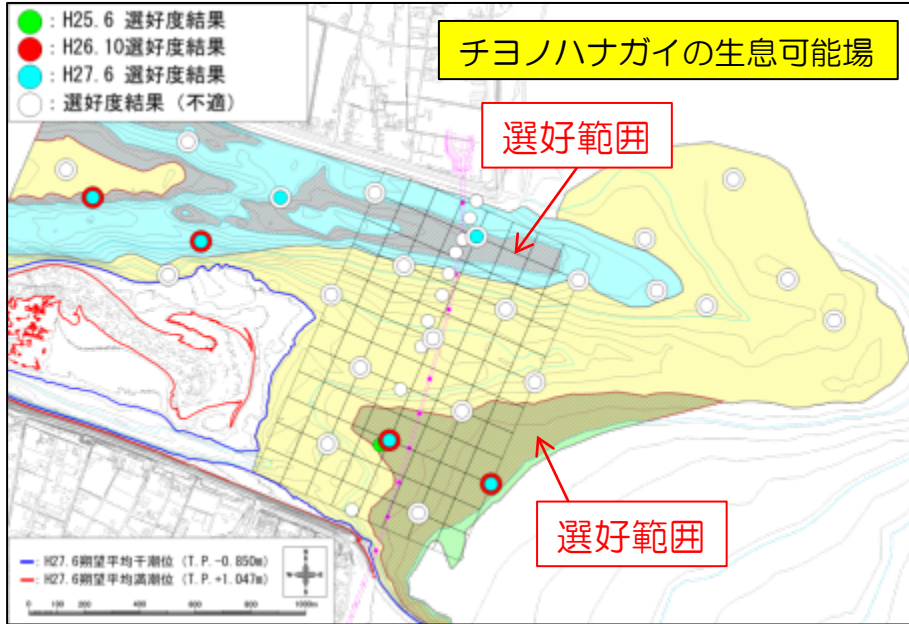


※点の評価はできるが、面(区分2)の評価ができない。

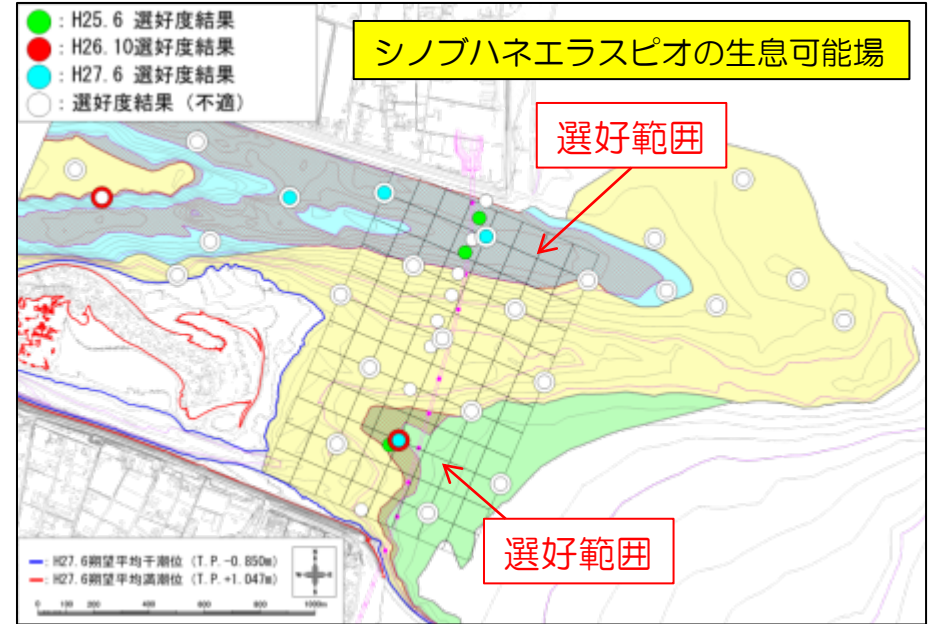
■底生動物のハビタット区分の検討②① ～区分2の指標種の生息範囲に対する浚渫の影響評価～



参考に、チヨノハナガイとシノブハネエラスピオの区分2と区分3における地盤高の選好範囲を抽出した結果を以下に示す。



地盤高：T.P.-7.7m～-6.6m & T.P.-4.4m～-2.2m



地盤高：T.P.-7.7m～-5.5m & T.P.-3.3m～-2.2m